



あまり深く考えずに、なし崩しに物事が行なわれている現在。人間に関する技術は一度使われるとそれを否定することは困難になる特殊性をもっています。科学の成果の社会への活用を経済的価値だけで判断せずに、本質は何かを考え、次の世代につないでいきたいという願いをこめての話し合いです。

## 「文化の切れはし」と「自然」

価値観をつくっていくために

**金森 修** 東京大学大学院教育学研究科助教授

**中村桂子** JT生命誌研究館副館長

中村——急速に進んでいる生命科学研究を歴史・哲学の面から検討することの重要性を話し合いたいと思っておいでいただきました。

金森——科学的概念の変遷を分析するフランス哲学を専門にしましたが、書齋で古い文献に埋もれているのではなく、現実の問題に向き合い、哲学を役立てたいと思ったのです。そうしたらやはり面白いのは生命科学でした。

### 優生学と生殖技術

金森——最近気になって追跡しているのが優生学です。優生学というとアルコール中毒者の断種やナチスの大量虐殺のイメージが強く、決定的に否定されたものと考えられてきた。ところがここ数年、興味深い傾向が出ています。国家が公的権力により個人の生殖の自由を剥奪するというかつての優生学とは違う形での優生志向です。

中村——個人がいわゆる“よりよい人間”を求める風潮ですね。とくにアメリカは、「誰にも迷惑かけないなら何をやってもいい」という考えが強くなりましたね。

金森——本当にそう。ごく健康な子どもの背を高くしたいとか、女の子の顔をきれいにしたいとか。サイバースペースで、美人で知能指数の高い人の卵子が競売される時代です。個人が自分の子孫に自主的に介入するんだから、遺伝子改造もクローンもやってもいいじゃないかと言いつつ、それを止める論理をどうつくれるか。

中村——もはや体外受精は金銭的にも技術的にも日常医療ですからね。この技術の特徴は、科学者や医師の意識よりもむしろ生活する人、とくに女性が望むかどうかが決め手になるところにあります。

金森——生殖技術の先進国アメリカでは、交通事故で死んだ3歳の女の子の体細胞からクローンをつくる、それで親の悲しみが和らぐのならよいという論でクローンを

是認する声があります。

中村——人が生きるということを考えてほしい。3歳まで生きた女の子の思い出や存在はどうなりますか。その3年は消せないでしょう。もしあえて消したらその人生を否定することになる。一方、クローンで生まれた子どもは代替品であって、その子どもの人権も否定している。子を亡くした一時的悲しみはわかりますが、後悔するでしょう。

金森——ヒトラーが100人揃うからクローンはいけないなどという論はナンセンスです。私は、娘を亡くした悲しみもまた人生のひとつの成分であると思うのです。それを技術によって和らげるという考え方は文化史への侵害になる可能性がある。

中村——日本ではクローン人間については罰則つき法律ができましたが、法律があれば安心ということではありません。クローン人間が一人誕生したらその技術は否定できなくなります。体外受精がそうでした。人間の誕生に関わる技術はこういう特殊性があつて、怖いと思う。最近では体外受精はややファッション化さえしていますので、こうなったら止まる場所はないと思うのです。これに対応するのは、もう倫理ではないでしょう。

### 社会の中の生物学

金森——社会の大きな流れの中でいろいろなことがなし崩しにやられている。私は臓器移植に反対の立場ですが、もはやマスコミが反対派の声を上げなくなった状況で、命のリレーなどというきれいごとになった。それでも、私は「ノー」を言うべきだと思う。もちろん社会の価値観は、いろいろな人間がいろいろな考え方をもっているリベラルな状況であるべきでしょうが。

中村——私もリベラルが基本と思いますが、リベラルと言いながら流れができるでしょう。最近、崔在銀さん(韓国のアーティスト)と一緒に国境をテーマにした映画を

つくった時に、過去の記録フィルムをたくさん見ました。ベルリンの壁が破れて皆が喜ぶ場面と、ヒトラーの演説に群衆がワーッとなる場面で、映し出される人々の顔が同じなのに驚きました。

金森——それはすごい話だ。

中村——今になれば、あれは歴史の汚点と思うけれど、その時その場所にいた大衆は自分たちの未来は明

ると思っていた。人々の価値観というのは難しい。金森——純粋に悪いことなど誰もやらないですよ。純粋によいことも存在しない。善意のつもりが結果的に悪くなったとか、悪いと思っているんだけど多少くらいいいだろうと思ってやるとか、そういうことなんですよ。

中村——科学は新しい知識を人に役立てようと考えているけれど、ナチスの優生学は最先端遺伝学が教えて



生命誌研究館の展示室にて。





金森修さん

ね。科学技術政策もアメリカとの競争に眼を向けすぎるのはまずい。アメリカの生命倫理学者は70年代頃からあれこれ議論した結果、迷惑かけなければよいというタイプの考え方になっているでしょう。日本ではその変化を見ずに生命倫理という言葉が飛び交っています。経済や政策とからめて社会にしくみをつくらなければ効果はない。大事なのは、やはり幼児期の人間をも含む「自然」との接触でしょう。大人になってからの知識の伝達では対応できない限界があります。

金森——なし崩し的な社会の流れの中で、我々は価値観をつくっていくことを考えねばならない。私はこれまで哲学を中心に本を読んだり勉強してきて、直感的な自分なりの価値判断をもっている。この私の背景にある「文化の切れはし」が、私にこれは醜いんだぞ、これは美しいんだぞ、といった価値を感じさせていると考えるのです。どんなに困難でも私自身の「文化の切れはし」を信用し、醜いと思ったら醜いんだぞ、美しいと思ったら美しいんだぞ、と言い続ける。それが社会に受け入れられるかどうかは別にしても、何らかの起爆力になってほしい。

中村——「文化の切れはし」と「自然」とのつながりに、すべての文化に共通するものと日本らしさがありますでしょう。リベラルな社会を求めるなら一人一人が考える人である必要があります。センスのある質の高い人、考える人が社会をつくっている状況にして、生き生きとした未来へつなげたいですね。 (写真＝桑島昌志)

くれることと当時の人々には思われたわけですね。

金森——問いかけるものは、重いですね。

中村——優生学は過去の話ではないのです。ヒトゲノムの配列が決定し、ゲノムから個人の体質を知り医療につなげる可能性が広がっており、医療の質の向上は当然望みますが、突っ走らずに考え考えやらなければいけないと肝に銘じなければ。

金森——ゲノム研究はアメリカの企業がイニシアチブを取り、日本のジャーナリズムは研究の遅れを取り戻せ、特許を取れ、と大騒ぎですね。生物学は長い間基礎的なもので来たはずなのに、それがもっとも商業的になっている。知の総体全体の中の位置づけを考えると、研究者個人の面白さや知的好奇心が二次的なものになり、巨大科学化していくゲノム研究の姿が見えてきます。

中村——「知」は本来、一人一人が、面白いとか大事とかよく考えながら進めていくものであり、巨大プロジェクトといえどもそれを忘れてはいけないと思います。ゲノム研究は科学者だけでなく社会全体の問題ですから、誰でもが考えられるようになっていないといけない。生命誌研究館は、個人が知的であることの重要性をもとに、多くの人が知的になれるしかけづくりをしているつもりなのです。しかけが大事でしょう。

### 価値観をつくっていくために

中村——経済価値だけで進んだら、遠からず危機的状況がやって来るような気がして。生命に関して知的に敏感であるためには幼児期に生きものとしての感覚を身につける教育しかないと思っています。金森さんも教育学部にお移りになったのを機会に。

金森——教育はまったく素人ですが、私なりの問題意識を少しでも若い人たちに伝えて、彼らの興味の中で考えてもらいたいと思っています。

中村——皆でいてねいに本質を考えるべき時ですよ

かなもり・おさむ

1954年札幌市生まれ。パリ第一大学哲学博士。東京水産大学教授等を経て現在、東京大学大学院教育学研究科助教授。フランス系エピステモロジー(認識論)研究に加え、日本の現代科学論を成熟させたいと奮闘する。主な著書に『フランス科学認識論の系譜』(勁草書房)、『サイエンス・ウォーズ』(東京大学出版会)、『遺伝子改造社会あなたはどのように』(洋泉社)などがある。



中村副館長